

海部の地理(三)

― 臼杵と佐賀関 ―

矢野 弥生

(会員・佐伯市中山区)

集落の構成と高度分布

臼杵市は、臼杵湾奥部の臼杵・末広の二河川がつくる小さな複合三角州に発達した市街地と、周辺の農漁村的性格の強い多くの小集落からなっている。

周辺部の小集落は、臼杵湾岸沿いの山地が海に迫ったリアス式海岸(1)の入江に在る小平地や小河川の谷底平野、各地に点在する丘陵地・台地・山腹斜面や山麓などに分布している。

二〇七の小

集落で構成

臼杵の集落の構成を見ると、表7のとおりである。大別すると、一地区になり、小集落は二〇七に達する。行

政区を見ると、臼杵市の全域は一九七区に分けられており、区長が市行政の末端を委嘱されている。また、区の下に組(一〇から二〇世帯)があり、組長が統括すると

いう自治組織になっている。

しかし、同じ区でも江無田・佐志生・井村などのように五〇〇世帯を超える規模の大きい集落もあれば、馬代(ばだい)・馬代住宅・横網代・久保浦・並場(おらば)清水などのように二〇世帯未満の小集落もある。

高距集落

集落の高距的限界を見ると、最高所は

は東神野

市の南端部に位置する東神野の川原内の三八〇メートルで、同地区の中心集落の

宮本は二四三メートル、上忠野二四〇メートル、下忠野は一九〇メートルに位置している。これらの小集落はカールス地形の八戸高原の南西、姫岳の南斜面に開けた山腹に立地した山地集落である。

そのほか、標高三〇〇メートルの山地に集落立地を見るのは、市の北部、佐賀関町との境に近い佐志生地区の藤尾三五〇メートル、大分市境に近い山間部の松ヶ嶽三二〇メートルで、いずれも分水嶺に近い山頂付近に位置する。山頂付近は、古くからの交通の要所であった再進峠(標高五二二メートル)や御所峠(ごせんたお)標高二九八メートルがある。

また、佐賀関との境の二〇〇メートル付近に佐志生地

表7 白杵市の集落数と集落別人口

集 落 名			昭和40年3月1日		昭和45年3月1日		昭和50年3月1日		
大ブロック	小ブロック	集 落	人 口	構成比	人 口	構成比	人 口	構成比	
1	白 杵	6	35	17,029	36.3	14,201	33.5	12,887	32.4
2	市 浜	3	13	4,244	9.1	4,915	11.6	5,707	14.4
3	下 南	5	14	2,917	6.2	2,777	6.5	3,037	7.6
4	上 浦	4	6	2,870	6.1	2,498	5.9	2,368	6.0
5	深 江	1	7	1,286	2.7	1,117	2.6	976	2.4
6	海 辺	4	15	3,457	7.4	3,178	7.5	2,954	7.4
7	佐 志 生	1	4	2,981	6.3	2,558	6.0	2,312	5.8
8	下ノ江	3	22	2,423	5.1	2,225	5.2	1,936	4.9
9	下 北	3	31	3,324	7.0	3,230	7.6	2,936	7.4
10	上 北	3	10	1,820	3.9	1,685	4.0	1,345	3.4
11	南 津 留	10	50	4,601	9.9	4,067	9.6	3,284	8.3
	計	43	207	46,952	100.0	42,451	100.0	39,742	100.0
集 落 名			昭和53年3月1日		昭和56年3月1日		昭和59年3月1日		
大ブロック	小ブロック	集 落	人 口	構成比	人 口	構成比	人 口	構成比	
1	白 杵	6	35	12,660	31.1	12,081	29.6	11,845	28.9
2	市 浜	3	13	6,310	15.5	6,839	16.7	7,220	17.7
3	下 南	5	14	3,263	8.0	3,607	8.8	3,337	8.2
4	上 浦	4	6	2,310	5.7	2,228	5.5	2,161	5.3
5	深 江	1	7	932	2.3	862	2.1	853	2.1
6	海 辺	4	15	3,150	7.8	3,295	8.0	3,543	8.7
7	佐 志 生	1	4	2,245	5.5	2,158	5.3	2,070	5.1
8	下ノ江	3	22	1,961	4.8	2,023	5.0	2,058	5.0
9	下 北	3	31	3,311	8.1	3,448	8.4	3,557	8.7
10	上 北	3	10	1,324	3.3	1,296	3.2	1,287	3.2
11	南 津 留	10	50	3,204	7.9	3,014	7.4	2,901	7.1
	計	43	207	40,670	100.0	40,851	100.0	40,832	100.0

『統計うすき』（昭和58年版）による。

区の大久保集落がある。標高一〇〇メートルを超える位置に集落があるのは、長浜一九〇メートル、森木一六〇メートル、内畑一四〇メートル、乙見一二〇メートル、横網代・中川の一〇〇メートルなどである。臼杵市の唯一の鉱泉で、結晶片岩層から湧出することで全国的に珍しい藤河内の六ヶ迫鉱泉の集落は、標高九〇メートルの谷間に立地している。臼杵市の集落のほとんどは、標高五〇メートル未満の低地に分布している。

集落の形態と立地

臼杵湾の沿岸に多い塊村
集落は家々の集合であるが、集合の仕方は極めて多様である。家と家

が数十メートルから数百メートルも

へだたって孤立する典型的な散村と、数十戸ないし数百戸の家屋が密集する集村に分けられる。その両者の間には家屋数・密度及び集まり方で規則的か不規則的かといったところで、多くの形態が区別される。また、集村はその平面形態から家屋が数十戸で、塊状に固まった塊村（かいむら）、山麓・自然堤防に沿って列状に立地した

列村、主要道路に沿って並列した路村、宿場町・市場町のように道路に沿って密集した街村、中央の広場を囲んで円形または楕円形に並んだ円村などに分けられる。

多くの集落が集村をなしているのは何故か。それは、人間の集団性によるほか、一般的には、1. 乏水地域では水の得やすい所に、2. 低湿地では、自然堤防などの微高地に集中する。3. 米作農業や漁業のように共同作業を必要とする地域、4. 社会不安のために共同防衛を必要とする地域または時代には集村が多いといわれる。

臼杵市に点在する各地の農漁業を営む集落を見ると殆どが集村であり、塊村が多く見受けられる。特に臼杵湾の沿岸に立地する農漁村は、九州山地が海に迫ったりアス式海岸の小入江の平地に道路も狭く、家屋も不規則に集合して塊状をなしており、佐志生・下の江・中津浦・大浜・都留・板知屋・大泊・風成・泊ヶ内などの集落は代表的な塊村である。

また、市街地に近いが、海添の森木の小集落は、タタラ川を挟んだ緩傾斜の山腹に散居的に立地しているものが多い。山地集落の横網代や藤尾の小集落も、どちらかといえば散居的な集落である。

多い台地 の集落

臼杵の集落がどのように立地しているかを、地形との関係から考えてみたい。

地形上から臼杵の集落を分けると、1.低

地の集落、2.台地の集落、3.山地の集落に分類される。

まず、低地の集落では、臼杵川・末広川がつくる複合三角州上に立地するもので、旧城下町の地域をはじめ、市浜（旧市場町）から熊崎付近までに分布する集落が主なものである。

また、下ノ江・佐志生の河川がつくる谷底平野や臼杵湾沿岸にある小入江の狭小な低地に立地する集落がある。

臼杵湾南岸に立地する柿ノ浦・久保浦は、ともに愛媛県の宇和島からの移住者でつくられた漁業集落である（2）

豊後水道西岸域の市町村で最も台地が多いのが臼杵である。古くから台地は、耕地や居住地として重要な位置を占めていた。台地の集落の主なものとしては、二王座・福良・野村・野田・清太郎・田井ヶ迫・望月・深田・家野・荒田・前田・戸室・江無田のほか、熊崎川沿いの稲田・大野・田井付近に広がる台地、末広川と熊崎川に挟まれた井村付近の台地、中臼杵や久木小野付近の台地

など極めて多い。中臼杵や久木小野付近の台地は、火山灰台地、そのほかは殆ど阿蘇火砕流（3）の溶岩台地から出来ている。

臼杵市の森林面積が総面積に占める割合は、六六・四％であり、山地が多い。従って山地集落の発達をみるが、東神野や松嶽・大久保・藤尾などが代表的なものである。また、山地集落では、日照と地形という二つの自然的条件によってかなりの制約を受けており、東神野や松嶽では南向き斜面や南向きの谷間に家屋が立地したものが多い。

集落と地形の傾斜度の関係を見ると、低地の集落は傾斜度三度未満、台地の集落は三から八度未満、山地の集落は八度以上の所にほぼ立地している。沿岸地域では、一五から二〇度の急傾斜地に家屋があるのは、臼杵湾南岸の清水の集落である。

臼杵湾南岸の臨海集落

臼杵湾南岸沿いには、板知屋から臼杵市最東端の泊ヶ内まで一三の臨海集落が点在している。ここでは、大分



風成の集落

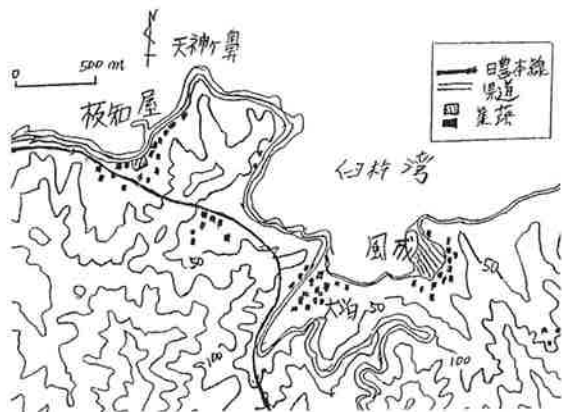


図7 三地区の位置と地形

大学地理学教室の調査報告(4)などを基に、主として市街地に近い板知屋・大泊・風成の臨海集落について、集落の立地や集落と人口、家屋構造、最盛期の突っ棒漁業について述べたい。

集落の立地
臼杵湾南岸の小支湾の湾奥部に板知屋、緩傾斜地に風成・大泊はほぼ平地

に立地する。ともに、前後は、図7に示すように海と山地である。集落の高距限界は海拔五〇メートルである。背後の山地は高度の割には急峻で、平均傾斜度八度に達する。

この三集落の成立時期については確実なことは判明しないが、『臼杵小鑑』には、板知屋は「大泊の属なり。臼杵より半里、家一八軒、湊北風無し」とあり、風成については、『臼杵小鑑拾遺』には、「湊何風にもよし。考ふるに風無といへるもこの意なるべし」とある。

集落と
人口
集落の規模を見る
と、昭和六〇年では
板知屋が最大で一七

六世帯・七四九人、次いで風成が一七五世帯・七二五人、大泊一〇八世帯・四一七人となっている。弘化二年(一八四五)の絵図によれば、板知屋村約八一

戸、風成村七二戸の家屋の記号が記されている。また、明治初年には、板知屋八六戸・五五二人、大泊六六戸・三七八人、風成九〇戸・五四一人であったという。

昭和一〇年（一九三五）の国勢調査では、板知屋一四七戸・七一七人、風成一二八戸・六一二人、大泊八三戸・四八四人となっている。

その後、分家あるいは引揚者など地区外の者の流入によって戸数が増加しており、明治初年と現在とを比較すると、板知屋は二倍、風成は一・九倍、大泊は一・六倍となっている。過去百年あまりで我が国の人口が約四倍増加していることから見ると、増加率は大きいとはいえない。

板知屋と風成は家屋が密集した塊村である。海岸よりの地区では、三つの集落を結ぶ幹線道路沿いに集中している。また、風成の海岸の埋立地は、風成の子村的性格を持つ地区で、分家した二・三男の居住者が多い。これに対して大泊は、他の集落に比べて平坦地が広いため、家屋の分布はややゆるやかである。

民家の構造

宅地の規模は一定ではなく、各地区によって異なっている。板知屋・風成

は広い所で一〇〇坪（約三三〇平方メートル）、狭い所で一五坪、平均して五〇から六〇坪である。これに対して大泊は、広い所で三〇〇坪、狭い所で三〇坪、平均して一〇〇坪以上である。建坪は、風成、板知屋においては宅地と大差はない。大泊は広い宅地内に庭などを構えている。

屋根は殆ど瓦葺きであるが、戦前までは茅葺きの屋根が普通であった。ただし、板知屋は茅場がないため、昔から瓦屋根が多かったという。茅屋根は一〇年に一度葺き替え、年始の総会でその年に葺く三乃至四軒の家を決めた。葺き替えは地区総出の共同作業によった。

その茅を刈り取る時期は大泊が十一月、風成が一二月であった。図8に示した間取りは、各地区でほぼ代表的なものと思われるものであるが、原型のまま残されている大泊のものを除けば、改造されていて、昔の間取りを見ることは困難である。大泊では、昔ほどの家にも土間脇に唐臼があり、また炊事場を釜場、食事をする所を台所と呼んで、両者は区別されていた。

三地区の民家を比べると、大泊は古くから農業が主体であったために、他の二地区より比較的農耕向きに造ら

板知屋 (K氏)

六丈の間 6	奥の間 6	台所 6	炊事場	風呂
座敷 8	玄関の間 8	にわ(土間) 玄関		
納屋				

大泊 (I氏)

15坪

前の縁		押入	玄関	米びつ おこうじん様	唐白場	
床の間 柵	座敷 8	中 の間 5	11.5			
仏 だん	座敷 8	神柵	台所 10			釜 場
床 の間	座敷 8	奥 4.5	戸柵 10			
先の縁		はきおとし	戸柵	土間		

(注) 150年前の建築物

風成

物 置	水飲場	なんど 3	4	押入
	炊事場	6	8	仏だん
				床の間
	玄関	縁	押入	

図8 民家の見取り図

(『大分県地理』第11集
〈昭和46年〉による)

最盛期の
突ん棒漁業

臼杵湾南岸の突ん棒漁業については「臼杵湾の漁業」の項で述べたので、漁船構造や乗組員の構成等について、

れている。更に、殆どの家が一から二棟の納屋を有し、作業あるいは収納に利用した。これらは、現在では地区内に僅かに残っているに過ぎない。これらの地区において、部分的に改善されてきた民家も、文化住宅に新築する家が多く、間取りは言うに及ばず家屋の外観も、年々近代的なものに移り変わりつつあり、この傾向は特に大泊において著しい。

その最盛期のころについて述べる。

漁船の構造と乗組員の構成

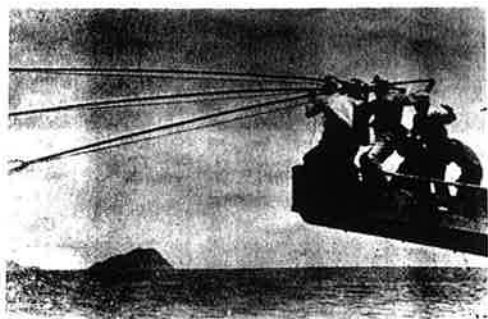
ゼル機関化が進み、馬力一〇から二五〇馬力程度である。構造上の特色は、前方に突台が長く突き出し、魚群探索用のマストを有し、また、魚群追尾に敏速な操船を要するために、操舵は握棒による手動で行っている。鋼船では急な舵が切れないので、全て木船である。

乗組員は一隻当たり九乃至一二名で、操業中の魚群の

探索は全員の見張りで行う。操業中の構成は次のとおりである（5）。

船長兼漁労長一名、一番・突手二名、一番 補佐・二番あがり三名、一名は追跡中操舵合図、一名は突手の補佐、見張員三名、操舵手二名、機関士一名の構成である（図9参照）。

これらの漁船は主に二つの組合に分かれ所属している。即ち、昭和二三年（一九四八）の水協法により、同年に



突ん棒漁船

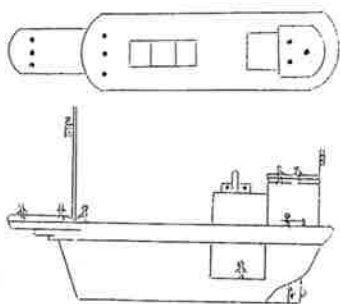


図9 乗組員の配置
（「大分県における突棒漁業」
〈三浦光信氏蔵〉による）

中古船の場合、購入に二百から三百万円、更に百万から二百万円の改造費がかかる。新造の場合は、この倍ぐらいかかる。無電・ローラン・方向探知機・電機モリ・レーダー・自動操舵装置などの装備費が四百万円ぐらいかかる。しかし、これら着装事業資金は他の漁業に比べると比較的少額である。

遠洋漁業協同組合が発足、同二六年に突棒漁業組合と改名したが、その後、組合の信用事業・海洋調査も行う。また、遠洋漁業組合は、一三名で信用事業をしていないが、三ヶ月返済を条件に漁業準備金を出す。これらのほか、津久見漁協に属する者二名、豊徳産業に属する者三名である。殆どが個人経営で、使用漁船は三〇トン台のディゼルエンジン付木造船である。千葉・岩手・愛媛などの諸県から中古船を購入し、改造したものが多く。

乗組員は一〇人前後、船主の家族・親族が半数以上を占める場合が多く、その他も地元出身者が多い。労働条件としては、長期間の操業に耐え得る健康のほか、浮上するカジキの発見が視力のみ頼るために、視力の強い者が求められる。

漁法は、海面すれすれに浮き上がったくるカジキを、船首から長い釣で突

と、見張りを強化し、カジキの背を目標に海面を探索する。魚群を発見すると、二番あがりは舵手・機関室に合図を送り、機関を全速にし、追跡を始める。十分に接近し、射程内に入ってから、釣竿を手にして待機している突手が釣する。

このように、操船の良否と突手の釣技術とがこの漁業の成績を左右するものである。釣竿に連結された縄を引いて逃げる魚を追い、疲れを待って船に引き揚げる。群魚の場合は、命中すればビン玉・旗をつけて次を追う眼を見て旗をつけた魚を船上に引き揚げる。魚体は釣を抜き、内臓を除去して漁船に格納される。操業は、一日中継続して行われるが、日没時ごろ、時化の前後、曇天

のとき、あるいは荒天で風のやや強いときに好漁をみる
ことが多く、天気の良い日は漁獲が少ないという(6)

乗組員の給与

乗組員の給与は、水揚金額から燃
料・氷・食料などの操業費を差し引
いた利益の五五%で、残りの四五%

が船主のものである。乗組員給与の配分率は、おおよそ
船長・機関長・無電局長各一・二から一・三、古参の突
手・操舵各一・一、その他は一・〇、新卒のコック〇・
七から〇・八(二年たつと一・〇となる)である。

雇用契約は一年間で四月に更新する。

注

1 陸上河川によって開析された谷の一部が沈水してで
きた岬と入江とが、鋸歯状に配列した複雑な海岸。ス
ペインの北西岸ガリシア地方に発達するリアと呼ばれ
る湾に語源を持つ(『地理学辞典』日本地誌研究所
昭和四八年)。

2 酒井富三『臼杵町誌』(臼杵図書館蔵昭和一五年)

3 大規模な噴火のとき、高温の岩片と火山ガスが混じ
った物質が、斜面を高速(時速一〇〇キロを超すこと
もある)で流下する現象であり、そこにたまった物質

が火砕流堆積物である。阿蘇カルデラの噴出物は、火砕流堆積物が大部分である（松本征夫・松本幡郎編『阿蘇火山』東海大学出版会 昭和六〇年）。

4 大分大学地理学教室「臼杵湾南岸の突ん棒漁村」（『大分県地理第一集』昭和四六年）。

5 『大分県における突棒漁業』（三浦光信蔵）。

6 （5）に同じ。

紙面の都合で「東神野の山地集落」以降は次号に回しました。ご了承下さい。

編集者

表紙解説

道 祖 神

道祖神と言えば安曇野（あずみの）が思い出される。

土地の人は道祖神の故郷は安曇野であると言う。確かに様々な形をした神々が道行く人に微笑み掛けているかのように、あちこちに座している。

この安曇野は東西約九キロ南北約三十キロという広い地域である。以前は安曇平とっていたが、戦後、俄かに有名になり、安曇野となったらしい。

ここには、約九百体もの道祖神が祀られているという男女二神並立形、合掌形、握手形、抱き寄せ形、酒器を持つ婚礼形などなど。中でも変わった道祖神が明科町池桜にある。有明な接吻道祖神で、女神の方が男神の手を握り、舌を吸う形で顔は冥想のぼかし彫りである。

では、道祖神は何の神か？ 安曇野では子孫繁栄の神であり、縁むすびの神でもある。また、旅の守り神、災難除けの神、悪霊や災難に立ち向かい「塞」ぎをする神でもあると云う。

この道祖神の祭には伝統的な物語や行事が多い。その中の一つ『三九郎』の「おんべ焼」（火祭）について次のような事が云われている。

昔、農民が背負ってきた重税・凶作・疫病の三つの苦勞をもじって『三九郎』というようになった。

写真は、穂高町で写したもので、伝説は穂高神社で聞いたものである。

写真並びに説明 軸丸 勇